自分にとってキリストはどのようなお方か

ヨハネ福音書6:66-71
【新改訳2017】

6:66 こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなった。
6:67 それで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいのですか」と言われた。
6:68 すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。
6:69 私たちは、あなたが神の聖者であると信じ、また知っています。」
6:70 イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です。」
6:71 イエスはイスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二人の一人であったが、イエスを裏切ろうとしていた。

【祈りながら考えよう】

（１）弟子たちのうちの多くの者が真の信者ではなかったのはなぜですか。。

（２）ペテロの返答「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます」はどういう意味ですか。

（３）多くの弟子たちが主に従うのを止(や)めてしまった根本原因はなんですか。

【解　説】

（１）弟子たちのうちの多くの者が離れ去る

「こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなった」(66節)

主イエスの十字架のことばは、それまで主に従っていた人々の多くに非常な不快感をもたらした。(しん)その結果、彼らは主のもとを去り、もはや主とかかわりを持とうとは望まなくなった。これらの弟子たちは、結局真の信者ではなかった。

いつの時代でも、教会に来ている人が全部、キリストと堅く結び付けられているわけではない。主イエスの時代でも、多くの人々が主に付いて行っていたが、あるところまで来ると、落ちて行ってしまった。

今日も、人々はキリストの十字架とかキリストの流された血について聞く時に躓く。それは、自分の罪を認めたくないためと、キリストの十字架上の死が自分の罪のためであるということが分からないからである。

（２）ペテロの信仰告白

「それで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいのですか」と言われた」(67節)

主は、多くの弟子たちが去って行った時、十二弟子には、彼らと違った答えを期待して、「あなたがたも離れて行きたいのですか」と言われた。

主のご期待に答え、この時もペテロが十二弟子を代表して、こう言っている。

「すると、シモン・ペテロが答えた。『主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。
あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。
私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています』」(68-69節)

この信仰告白は、実に優れた告白である。まずペテロは、「主よ」と告白している。それに続いて「あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます」と告白し、最後に、「あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」と告白している。

この告白の1つ1つを見てゆきたい。

①「主よ」

まず「主」という言葉であるが、これは明らかに神のことで、主権者として支配しておられる神である。このお方の御前には、私たちは「しもべ」でしかない。私たちはキリストの「しもべ」であることを、心の底から信じ、このお方によって罪の中から救っていただき、今のすばらしい生活があるのだということが分かっていると、ちょっとやそっとのことで、信仰が分からなくなったのどうのと言って騒ぎ立てるようなことはしなくなる。

ペテロは、キリストを「主よ」と言って告白したから、それに続いて、「私たちはだれのところに行きましょう」と告白できたのである。キリストによって罪から救い出されたことのすばらしさが本当に分かったなら、キリストから離れて行くことなどできるものではない。罪から救い出してくださるお方が、キリスト以外にあるでしょうか。

私たちの罪を背負って、その罪のための刑罰を身代わりに受け、私たちの罪をあがなってくださったお方が一体どこにいるであろう。キリストの十字架のあがないの意味が本当に分かったら、あっちこっちふらついたり、信仰が分からなくなったなどと、ばかなことを言わなくなる。キリストの十字架の死が自分のためであったということが分かるまで、その人は本当のキリスト者ではない。

②「あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます」

次に、ペテロは、キリストに対して、「あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます」と告白している。つまり、キリストこそ、私たちに永遠のいのちを与える御言葉を持っておられるのです。私たちを生かすいのちを与えるお方はキリストのほかにない。

③「神の聖者」

最後に、「神の聖者」であると告白しているが、これは非常に珍しい表現で、旧約聖書でも新約聖書でも余り使われない言葉である。新約聖書では、悪霊が、キリストのことを「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です」（マルコ1:24、ルカ4:34）と告白しているところに出て来る。これは、神の御子という意味とほとんど同じである。

④「信じ、また知っています」

さらに、ペテロはこう言っている。「私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」

ここで、「知り、信じています」と言わず、「信じ、また知っています」と言っていることに注意したい。信仰の事柄は、知った上で信じるのではなく、信じることが先で、そうすると分かるのである。

頭で理解してから信じるというのであれば、理解できることしか信じられないことになる。ある程度キリストについて知る必要はある。何も知らないで信じるというのであれば、それは妄信(もうしん)のたぐいである。

しかし、このお方は信頼できると分かったら信じることである。全人格的にキリストに寄り掛かることである。すると、このお方が本当に信頼できるお方であるということが分かるのである。

（３）信仰の自己吟味の必要を促す

ところで、その告白をペテロがした後、主は彼らに信仰の警告を与えられた。

「イエスは彼らに答えられた。『わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。
しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です。』」(70節)

この主の警告の言葉について、ヨハネは説明を加えて、こう記している。

「イエスはイスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのであった。
このユダは十二人の一人であったが、イエスを裏切ろうとしていた。」(71節)

それでは、どうして主は、ペテロの信仰告白の直後にこのようなことを言われたのだろうか。それは、彼らに信仰の自己吟味が必要なことを悟らせるためであった。

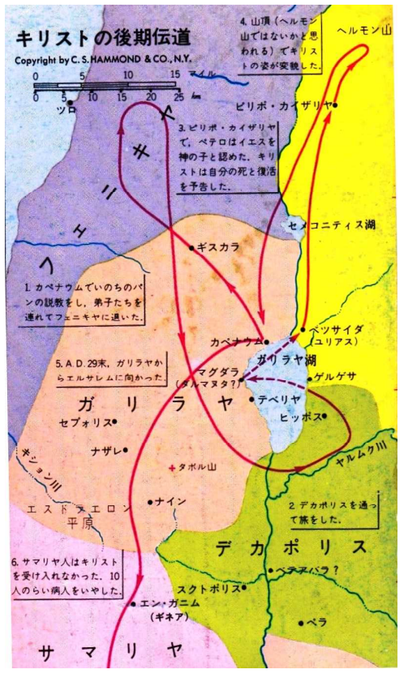
主はこうは言われなかった。「わたしがあなたがた12人を選んだのではありませんか。それなのに、イスカリオテのユダはわたしを裏切ろうとしています」と、そうではなく、「しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です。」

この時、まだだれが主を裏切る悪魔的な仕業をするか、だれにも分からない。しかし、このようなことが、たとい信仰の自己吟味として、主の御口から発せられたとしたら、それ以後の主の12弟子たちのグループは疑心暗鬼になって、お互いへの不信感がつのってきても不思議ではない。

しかし、そうならなかったところに、主の尋常一様でない愛が弟子たち１人１人に注がれていたことを知ることができる。

そして、それと同時に、そういう悪魔が出ないようにという主のお心配りであり、またもしもよくない思いを抱くような者があっても、悔い改めるようにと促す主の愛の訴えであったことが分かる。

それにもかかわらず、イスカリオテのユダは最後に愛する主を裏切ってしまう。



（４）まとめ

そこで、最後に、私たちが信仰の後退をしないように、堅くキリストにつながっているために、どうしなければならないかについて、まとめてみたい。

まず、キリストの十字架の身代わりの死が自分のためであったという信仰を持つこと。実はこの１点に尽きると言ってもよいが、さらに付け加えて言えば、このキリストの十字架の死が自分のためであったということがわかるということは、これ以外のどこにも私たちの罪からの救いはないのだということが分かるということである。

キリストを離れて、一体どこに行くことができるのか。ペテロと共に心から告白できることが肝心なのである。

人に躓いたとか、教会に躓いたと言って教会から去る人がいるが、そういう人は、キリストの十字架が分かっていないから躓くのである。